



2026 新年あけましておめでとうございます

皆様、健やかに新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。旧年中は当団体の事業にご支援、ご協力をいただき深く感謝申し上げます。本年も変わらぬご支援をいただきますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

京都芸術大学第19回学生創作研究助成金制度採択事業 カンボジアプロジェクト2025 「ありがとうの花をさかせよう」

2025年8月10日（日）から13日（水）の4日間の日程でカンボジアプノンペン「ひろしまハウス」を訪問し、約30名の小学生、中学生を対象に「カンボジアプロジェクト2025～ありがとうの花をさかせよう」を実施しました。今回も教員や作業療法士など5名のスタッフの参加を得ました。「ありがとうの花をさかせよう」をテーマに、「和紙染め」体験、そして染めた和紙を使用して「ありがとうの花」の貼り絵を制作しました。また、それぞれのボランティアの専門性を生かして、紙芝居の読み聞かせ、ストレッチなどのワークショップも行いました。

日本語の中で最も美しい言葉とされている「ありがとう」。この言葉の意味を様々な取り組みを通して、カンボジアで日本語を学ぶ子どもたちに感じてほしいと考えました。



「子どもたちを取り巻く教育環境」

今回で「アジアの風」としてのカンボジアプノンペンの「ひろしまハウス」訪問も9回目を迎えました。子どもたちの学習環境も様々な支援により少しずつ整ってきています。しかし、教育制度が未成熟なため、テキストやプリント学習といった学習が中心であり、豊かな感性を育む美術や音楽といった学習はほとんど実施されていないのが現状です。

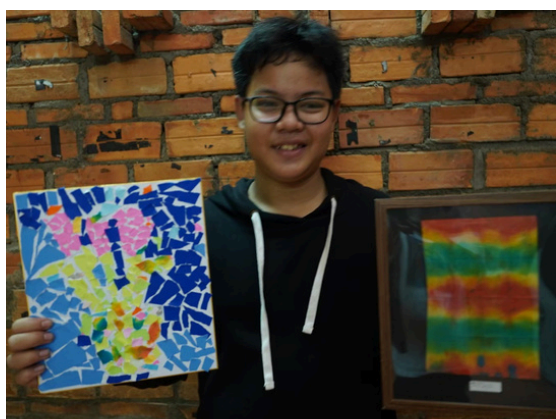
カンボジアにおける美術教育は「社会科」の一部として扱われています。また2023年から公立小学校に週一時間の「芸術教育」が割り当てられました。しかし、教師自身が図工・美術の基礎教育を受けた経験がため、授業を展開できるだけのノウハウや教材が不足しています。特に地方や貧困地域では教材や設備がないため、造形的な学習はほとんど実施されていません。国語、算数などの主要教科に教育資源が集中し、情操教育としての図工、美術は優先度が低いのが現状です。また、学校外でも、児童生徒は重要な労働力でもあるため造形活動に取り組む機会がほとんどありません。



↑完成した作品
←日本手ぬぐいを用いたストレッチ。日本の子どもの手描きイラストが描かれています。
✓全員で給食を食べました。
↓鳴子踊りを踊りました。



たくさんの「ありがとうの花」がさきました



プロジェクトに参加して



【福嶋 晃希（小学校教諭）】

カンボジアでのボランティア活動は、自分の価値観や日常を見直すきっかけになりました。同時に、私ができることはどんなことだろうと考え続ける旅となりました。

限られた教材や設備の中でも子どもたちが目を輝かせて学び、笑う姿に心を打たれました。どんな活動も子どもたちが楽しみ、熱中する姿勢に、逆に私自身が勇気をもらいました。日本語の学習をひたむきに頑張っていることにも強く感銘を受けました。子どもたちには是非いろいろなものを経験した上で、改めて今抱いている夢を「どうしても叶えたい」と立ち返ってほしいと思います。子どもたちの選択肢を広げるためには何をすればよいかを考え続けることがまず私にできることのひとつなのだろうと感じています。言葉の壁はありましたが「ひろしまハウス」の子どもたちはそれを感じさせないまっすぐで素直な優しい子たちでした。また、一緒に現地入りした日本人メンバーとの出会いにもとても感謝しています。



【神山 悟（作業療法士）】

そこには無邪気に走り回る子や授業に真剣に取り組む子がいて、とても生き生きとした空気にあふれていました。彼らは私が同じ空間に いることを自然に受け入れ、違和感なく場を共有してくれました。

言葉が通じなくても、ジェスチャーで何度も遊び方を教えてくれる 子もいました。そのやりとりを通して、一人ひとりの特徴や強みが少しずつ見えてきました。「『ひろしまハウス』に来ている子ども」という一つのカテゴリーで捉えてしまうと、本質を見失ってしまうことにも気づきました。異国の地で言語や文化などが違うからこそ子どもたちを丁寧に観察し、その中から自分にできることを見つけていく必要があると感じました。

「人の役に立とう」という思いは大切ですが、度を越すと「してあげる」という関わりになり、相手を受け身にさせたり、こちらの理想を押し付けることにつながってしまうかもしれません。むしろ「特別なことをせず、ただ同じ時間を共有する」ことが、子どもたちの成長にとって一番の近道になる場合もあるのだと学びました。



【大久保 雅弘（元JICA隊員）】

国際ボランティアに従事する際に意識したいのはその継続性。その場限りでなく、継続的に取り組める内容であったり、交流が始まるきっかけになったりする形が望ましいと考えてます。今回のアイディアはとても良かったと思います。そういった意味では、7年ぶりに取り組んだ「鳴子踊りを踊ろう」という企画の際に、

過去に寄贈した法被や鳴子がしっかりと管理されていて、すぐに使える状態で残っていたことに感動しました。あの頃、一緒に踊った子どもたちは卒業や帰省などでもう残っていませんが、メンバーが入れ替わっても子どもたちが懸命に取り組んでくれる姿を見て、「時代が変わっても好奇心に目を輝かせる姿は変わらないな」と思われました。今後も交流を通して、子ども達が学び、育つきっかけを提供していければと考えています。

